

青梅市文化財ニュース

第359号

平成29年9月15日

発行 青梅市文化財保護指導員連絡協議会

青梅市郷土博物館（青梅市駒木町 1-684 TEL0428-23-6859）

初音座（青梅大映）

青梅市内には、かつて、「初音座」という芝居小屋（のちの青梅大映）、「青梅キネマ」と「青梅セントラル劇場」の三つの映画館がありました。

今回は、その一つの「初音座（青梅大映）」について、御存知の方々からのお話しをもとに、ご紹介いたします。

初音座は、現在の本町121番地にありました。青梅市郷土博物館の資料によると、明治35（1902）年に初めて催しを行ったとあります。

建物は歌舞伎風造りの大きな2階建てで、青梅街道から入る横丁は芝居（シバイ・シバヤ）横丁と言われていました。

入口は建物の北側にあり、入口を開けて入ったところに、「デック」（チケット売り場）がありました。入場券を買い、中に入ると「もぎり」（半券はお客様用）がありました。その左側奥には、下足箱があり、下足番に履物を預けました。

客席の三方には柂目の杉板で、枠は黒塗り、金色の引手金物の見事な板戸が一面に立っていました。客席は座敷（畳席・琉球畳・へりのない畳）になっており、枱席で座布団が必要な人は売店に行ってお金（5銭位）を払って借りることもできました。

売店では、ノリ巻き、団子等も売っていました。休憩中には飯台を持って客席で食べ物を売ったりする人もいました。

正面には舞台があり、入口の東側には暖簾がかかっていて出演者の出入り口になっていました。下の奈落は材木がむき出しで、回り舞台は人力で回していました。

2階席もあり、客席は両端と後ろの方にありました。

客席の天井は、格天井（ごうてんじょう）で中央は白い漆喰仕上げで、真ん中が梅花の鰻絵（こてえ）でシャンデリアが下がり、周りも鶴の鰻絵（こてえ）が描かれ、きれいでした。

芝居小屋には、二宮歌舞伎や田舎回りの芝居、喜劇、歌舞伎（戦後では市川八百蔵など）や、人間ポンプ、生首およねなどの見世物もきました。昭和15年頃には、千草みどり一座というドサ回り（10代女性のチャンバラ劇）がきたり、ターザン映画もやりました。

また、歌手の岡晴夫、近江俊郎なども、10年間位毎年来演していたほか、東海林太郎、藤山一郎、灰田勝彦、京マチ子、戦後には宮田輝、高橋圭三等も来演しました。近江敏郎

や南田洋子が来演した時は、支配人の家の2階で着替えをしてから、初音座に行ったそうです。

昭和25年～30年代をピークに、地元の軽音楽ふるさと楽団（勝沼・住江町・本町などの人達）が演奏することもありました。

公演がない時は、青年団で戦争に行った家族を招いて慰問で、ふるさと楽団で歌と演奏や、のど自慢をやったり、踊りのおさらい会を開催したりしました。

治安維持法の取締りが厳しかった頃は、巡査が客席の後方にある一段高い台の上から、公演を監視していて、時々注意したり、それでもやめないと「弁士中止」といわれました。

また、歌舞伎役者が来ると、町中を人力車に乗って太鼓を叩き、のぼり旗を立てて、お披露目のお練りをしました。

初音座は、株主による経営でしたが、経営が思わしくなくなり、北村正治氏が買い取りました。昭和25年頃にそのまま映画館（青梅大映）にして、舞台をスクリーンに変えました。椅子席になった時期は不明です。

2階の客席後方（ちょうど1階の廊下の上）には映写室があり、映写機が2台置かれていました。映写機は、カーボンを使っていたため、火が出てあぶないので水栓式でした。

映画館になってから、建物の東北角に事務所を建造しました。建物の東側外に作業所を増築し、看板などを作製していました。

はじめは大映映画が主でしたが、その後、正治氏の子、次郎氏の代に代わると、他社の映画も扱うようになりました。

その後、映画業界の衰退により、昭和50年前後に閉館しました。

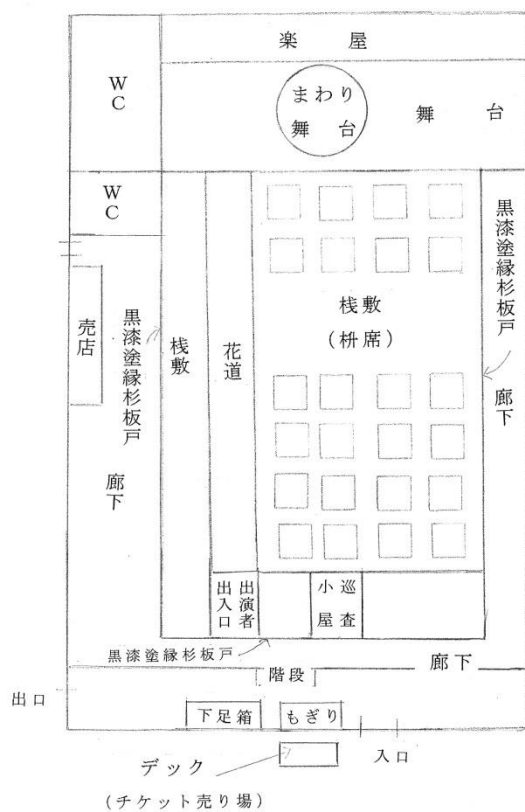
話を伺った人（敬称略）

石川博司・恩田敏造・川杉郁子（ようこ）・北村達也・齋藤慎一・
須崎茂・高橋平太郎・並木明・並木英次・三田野民治・本橋幸男

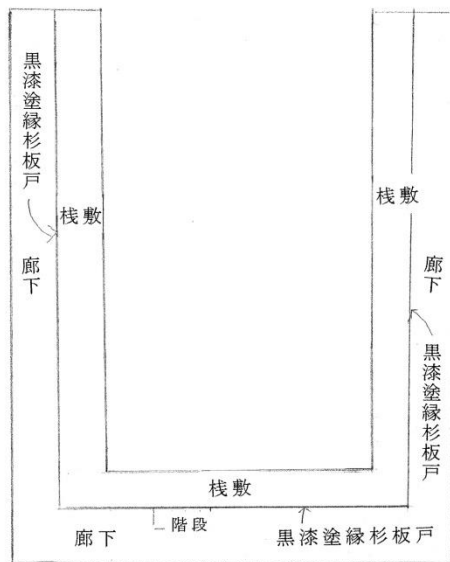
初音座について、御存知の方、資料・写真等をお持ちの方は、郷土博物館にぜひ御連絡ください。

（文責 東山啓子）

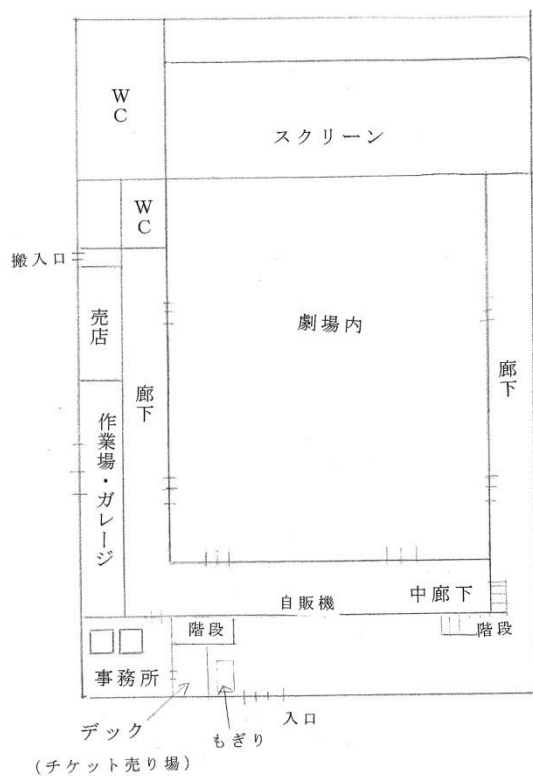
初音座 1 階



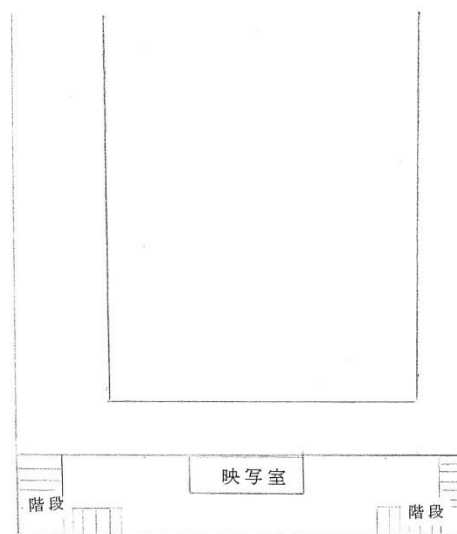
初音座 2 階



青梅大映 1 階



青梅大映 2 階



外壁はモルタル

今回、お話を伺った方のお話しをもとに作成